

# ”挑戦”の先に 見えるもの



「“挑戦”の先に見えるもの」は、瀬戸内国際芸術祭に関わる人たちの姿に光をあて、その挑戦の歩みをたどる連載企画です。

## なぜ、私たちはこの企画に挑むのか

日本総険はこれまで、法人向けのリスクマネジメント事業に取り組んできました。その本質は、「挑戦する心を止めずに、安心して一步を踏み出せる環境をつくる」ことだと考えています。

私たちが向き合っているのは、リスクそのものではなく、その先にある“挑戦”です。誰かが前に進もうとする姿に、私たち自身も力をもらってきました。

挑戦を応援する会社として、その現場で生まれる物語を社会に届けていきたい——そんな思いから、この企画を始めました。

瀬戸内国際芸術祭の会場でも、アートに関わる人、島で暮らす人、遠くから訪れる人など、それぞれが自分の想いを胸に、“挑戦”しています。私たちは、作品そのものではなく、その背景で動いている“人”の挑戦に目を向け、現場で出会った“挑戦する人”たちの日常や気持ちを、記録し伝えていきます。

シリーズ第3回となる今回の舞台は、瀬戸内海に面した港町、香川県東かがわ市・引田（ひけた）。2025年の瀬戸内国際芸術祭（以下、芸術祭）で、初めて開催エリアに加わりました。

北西の風を防ぐ地形を活かした引田港に、多くの船が風を待ち停泊したことから「風待ち・汐待ちの良港」として知られていました。室町時代には既に、瀬戸内海沿岸の船運ルートの拠点となる重要な港町として確立。江戸時代にかけては、塩・砂糖・綿といった“讃岐三白”の積出港としても栄え、廻船問屋や醤油醸造業のにぎわいが町を育みました。波穏やかな入り江に船が集い、人が渡り、文化が変わることで発展してきた地域です。

路地を歩けば、白壁の商家や蔵の佇まいが続き、往時の面影を今に伝えています。一方で、鮮やかなシャッターアートや町家を活用したカフェも点在し、懐かしさと新しさが共存する風景が広がっています。



そんな町を舞台に、「奉納和船（ほうのうせせん）」の復元という挑戦に取り組むのが、アーティストの乗原寿行（くわばらとしゆき）さん。失われた技術を現代に蘇らせようとする、その挑戦の物語を追いました。

## ■受け継がれなかった技術に挑む

引田が「風待ち・汐待ちの良港」と呼ばれていた当時、弁才船（べさいせん：弁財船とも記載される場合あり）という、国内の海運を支えた木造大型帆船が盛んに往来していました。

弁才船の船主や船頭は、出航前や大きな節目に航海安全・商売繁盛を祈るため、自らの船の縮尺模型を神社仏閣へ奉納しており、このとき納められた船の模型を「奉納和船」といいます。

奉納和船は非常に精巧で、製作は主に「船大工」や「船匠」と呼ばれる専門の職人によって行われていました。実際の和船の構造や細部の機装を、約10分の1スケールで忠実に再現する技術は、宮大工にも勝るほど。その造船法は世界的にも類を見ない独自のものです。船体の材に直接板を張り合わせて形をつくるため、西洋の船のようにあばら骨の骨格を持たず、極めてミニマルかつ特殊な構造でした。さらに「蒸しながら木材を曲げる」という高度な技能が駆使され、当時の船大工の技術力の高さを物語っています。

しかしその技術は継承されず、凶面が残されなまま途絶え、今では“ロストテクノロジー”となってしまいました。

\*\*\*

引田エリアで作品を出展することが決定した後、引田の風土や発展の歴史、現在までの歩みを細かに調べたという乗原さん。歴史をたどる中で、人や文化をつなぐ存在であった船に心を惹かれたことが今回の出発点だといいます。そして奉納和船の存在に触れ、後世に残していくべき技術や文化の再発見に繋げるプロジェクトとして進めていくことを決意します。

乗原さんは普段、デジタル技術を用いた表現を得意とされていますが、今回の芸術祭では、奉納和船の復元という大きな目標に向け、初めて本格的な木工に挑戦。培ってきたデジタル技術も活かしながら、文化の再現への道筋を描いています。

「木工」と「デジタル」。一見相反するよう思える二つの領域を組み合わせることで、幻の技術を現代によみがえらせる——そこに乗原さんならではの挑戦があります。



アーティスト・乗原寿行さん。地域の記憶と向き合い、一つひとつ非常に丁寧に掘り起こしながら、作品制作を進めている。

## ■奉納和船を探して

奉納和船の文化と技術に触れた乗原さんは、まず現存する船を探し歩くところから挑戦を始めました。普段は御神体のように大切に扱われ、公開されることの少ない奉納和船。乗原さんは香川県内の神社仏閣を一つひとつ訪ね、その姿に出会っていきました。

残されている奉納和船の多くは数百年前のもの。精巧な造りでありながら凶面も資料も残っていないため、乗原さんは現物を3Dスキャンしてデータ化。そこから形状や構造を割り出し、凶面を起こすという地道な作業を半年以上かけて実施。誰も知らない技術に触れながら、一つひとつ解き明かしていく過程には途方もない努力が想像されますが、乗原さんはこう語ってくれました。

「船の模型を精巧に作って、奉納していたというのは非常に面白い文化。造りがとにかくとてもすごいんです。僕からすると、とても面白い技術で作られた“船の彫刻作品”にしか見えなくて。こんなすごいものがあることを知ってほしいし、文化を再発見してほしい。船大工さんの造形文化を掘り起こしたいと思って取り組みました。」



壁一面に貼られた写真はすべて、乗原さんが実際に奉納和船を取材したときの記録。視点を変え、繰り返し確かめることで復元への手がかりを追求。

## ■廃材に新たな命を吹き込む

乗原さんはリサーチの成果を凶面に起こし、全長3.3メートルの奉納和船を忠実に復元しようとしています。

その制作には、引田の町で集めた廃材が使われています。取り壊された古民家の梁や柱、摩耗した海苔簀（のりす）、そしてアルミ缶。こうした廃材に新たな命を吹き込み、木材は船体そのものに、海苔簀は熱を加えて樹脂として再形成し、アルミ缶は溶かして金属部品へと生まれ変わらせます。

「木材が、端材と思えないくらい綺麗。すごく古い民家なので、使われている材自体が古く今では手に入らないようなものも多い。それでいて、中身が本当に綺麗なんです。質の良いものが引田の民家には使われているんですよ。制作にあたっては、奉納和船が作られていた当時どこにどの木材が使われていたかを推測し、近い種類のものを選んでます。」

と乗原さんは話します。例えば船の中心部など重要な箇所用いるアカマツは、曲げに強く、水に浮きやすく、大きな材が取れるという特性があると教えてくれました。乗原さんは、材料の一片にまで意味を込めながら制作を進めています。

引田にはかつて「船を作った端材で家を建てる」という文化があったといいます。地域に残るものを再利用するその姿勢は、現代的なリサイクルの発想を取り込みつつ、地域の記憶を船に刻み込み試みでもあります。引田の廃材を活用することで、この土地ならではの知恵や文化が再び息つき、船の形になって未来へとつながっていきます。



制作中の奉納和船。船底の中心となる「底板（センバ）」の部分の制作が進められていた。

3Dスキャンしたデータを元に型板を作り、型板に沿って木材を造形する。

大量の海苔簀。廃棄するしかなかったものが、素材として生まれ変わる。

## ■文化をつなぐ挑戦

奉納和船は単なる模型ではなく、船大工の高度な技術と、地域の信仰や暮らしを映す文化そのものです。

乗原さんが目指しているのは、かつての船の姿を丁寧に再現するだけでなく、その背景にある文化や精神を現代の視点で見つめ直し、未来へ受け渡すこと。そこにこのプロジェクトの本質があります。

地域に眠っていた知恵と素材を結び直し、作品として立ち上げることで、引田の記憶は新たな形となってよみがえります。

今回の取材では、かつての技術が現代の挑戦となって息づく瞬間を目の当たりにしました。

## <アーティスト紹介>

乗原 寿行（くわばら としゆき）氏  
1986年愛知県生まれ。東京藝術大学美術学部油画科卒業、同大学院修了。絵画・写真・映像・CGIなど、デジタルとアナログを融合した表現を追求するアーティスト。事実性や現実感、知覚や心理といった人間の根源的な経験をめぐる問いを軸に、研究と作品制作を続けている。第16回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞。現在、東京藝術大学共創拠点推進機構特任講師。

## <作品紹介>

プロジェクト名：「東京藝術大学×香川大学 瀬戸内海分校 まちづくりプロジェクト くんだりけ」  
乗原寿行「奉納和船の出航 - 「あまりものたち」の物神を、海に奉納する。」

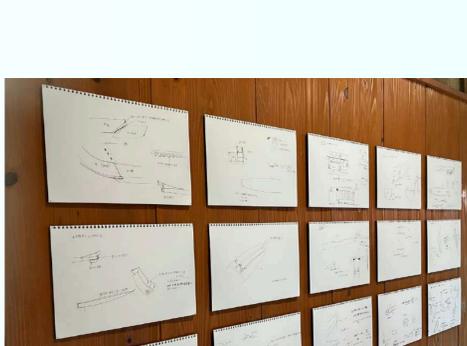
アーティスト・乗原寿行氏によるインスタレーション作品。  
引田エリアの「煙突広場」内の展示空間に、奉納和船の復元船と、その過程を記録した写真や凶面、収集された素材が並ぶ。

壁面には、乗原氏が神社仏閣を巡って撮影した奉納和船の調査写真が所狭しと貼られ、制作の軌跡そのものが空間を構成。かつての船大工たちの技術や文化が、現代のアーティストの手を通してどのように立ち上がっていくのかを目撃することができる。引田エリアにて、瀬戸内国際芸術祭2025の夏会期で展示された。会期終了後は別プロジェクトに引き継ぐ形で制作され、年度末に進水式が行われる予定。

※画像：瀬戸内国際芸術祭2025出展作品／撮影：日本総険  
※本画像の無断転載・二次利用はご遠慮ください



展示エリアの頭上には、乗原さんにて書き起こされた設計図がはためき、完成後の姿を想像させる。



現地調査結果の分析記録。幾度にも渡る試行錯誤を重ねながら、当時の技術をひも解く過程が並ぶ。